HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	渡し守の心境
Author(s)	鈴木, 栄太郎
Citation	各務同窓会報, 27
Issue Date	1939-02-20
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/77642
Type	column
File Information	A018_02_03all_Part50.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

る伊達君も昨秋應召で去られ今は助力者もない、これも銃後の奉公と覺悟はしてゐるものゝさて當事者には相當の苦痛である。

非常時局の朗讀は最早盡されてゐる。自肅自戒お互に持合せた全力を傾注し銃後の固めに萬全を期しにいと思ふのである。

渡し守の心境

鈴木榮太郎

幸に學校は只今何事もよく行つて居ると思ひます。然を云へばきりがありませんが、過去十五ケ年の學校の歴史のどのページもよく知つて居ます私の眼には、今の狀態はよく整備した時代の一つであるとさへ思つて居ます。學校一致の態勢が今日程よくいつて居る時代は過去にも餘り無かつたのでないかと思ふからであります。私は同窓生諸君の母校が何等特に雲ふ可き問題をもたず、何れの方面にも發展の一路を辿りつゝあると云ふ事を、誇張なしにお傳へする事が出來ます。そして其を何よりの幸と思つて居ます。

私自身には文字通り十年一日の如く何の進歩もなく、唯馬齢のみは年と共に加はり誠にお恥かしいのですが、はしたなき渡し守りとして寛恕して頂きますこんな歌があります。

渡し守
人を渡しておのが身は
水棹とりつゝ
世を終るかな

然し渡し守にも、さゝやかな矜持もあり喜びもあるのです。四季の運行も看られるし、月明の夜には詩興を覺ゆる事もあります。此頃私は獨酌の味を覺え夜更けて讀書に疲れた時など一人杯を傾けて、そこはかとなく思ひにひたる事があります。どうかして落涙一滴杯中に落す事もあるのです。少し老ひて來たんでせう。

年頭の自省

塚根千十郎

何かの雜誌で森本厚吉（法博）が此皇紀二五九九年の年頭にはZ旗が樹てられて居る。と記されて居た誠に同感である、勿論皇軍の威力には絶對的信頼を置くが所謂銃後の動き如何によりては、日本の運命はどうなることか、何としても其運命の定まるのは今年であると思ふ。

聖戰の目的が遠大であり、國家の使命が重大であるからには日本民族の活力が強盛でなくてはならぬ、それには先づ國民の